

《開幕》森美術館開館20周年記念展 私たちのエコロジー：地球という惑星を生きるために

2023年10月18日(水)～2024年3月31日(日) 森美術館(六本木ヒルズ森タワー53階)

環境危機への問いかけ、現代アートは何ができるのか？

森美術館は、開館20周年を記念して、2023年10月18日(水)から2024年3月31日(日)まで、「私たちのエコロジー：地球という惑星を生きるために」を開催します。

産業革命以降、特に20世紀後半に人類が地球に与えた影響は、それ以前の数万年単位の地質学的変化に匹敵すると言われています。この地球規模の環境危機は、諸工業先進国それぞれに特有かつ無数の事象や状況に端を発しているのではないかと。本展はその問いから構想されました。

「私たちのエコロジー」展では、国内外のアーティスト34名による歴史的な作品から新作まで多様な表現約100点を、四つの章で紹介します。第1章「全ては繋がっている」では、環境や生態系と人間の活動が複雑に絡み合う現実に言及します。第2章「土に還る」では、1950～80年代の高度経済成長の裏で、環境汚染が問題となった日本で制作・発表されたアートを再検証し、環境問題を日本という立ち位置から見つめ直します。第3章「大いなる加速」では、人類による過度な地球資源の開発の影響を明らかにすると同時に、ある種の「希望」も提示する作品を紹介します。最終章である第4章「未来は私たちの中にある」では、アクティビズム、先住民の叡智、フェミニズム、AIや集合知(CI)、精神性(スピリチュアリティ)などさまざまな表現にみられる、最先端のテクノロジーと古来の技術の双方の考察をとおして、未来の可能性を描きます。

本展のタイトル「私たちのエコロジー：地球という惑星を生きるために」は、私たちとは誰か、地球環境は誰のものなのか、という問いかけです。人間中心主義的な視点のみならず、地球という惑星を大局的な視点から見渡せば、地球上には幾つもの多様な生態系が存在することにあらためて気付くでしょう。本展では、環境問題をはじめとする様々な課題について多様な視点で考えることを提案します。また輸送を最小限にし、可能な限り資源を再生利用するなどサステナブルな展覧会制作を通じて、現代アートやアーティストたちがどのように環境危機に関わり、また関わり得るのかについて思考を促し、美術館を対話が生まれる場とします。



マルタ・アティエンサ
《漁民の日2022》
2022年
ビデオ、サイレント
45分44秒(ループ)
制作協力: ハン・ネフケンス財団、モンドリアン財団、
シェーン・アケロイド
コミッション: 第17回イスタンブール・ビエンナーレ
Courtesy: Silverlens, Manila/New York

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊原
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

出展アーティスト *姓のアルファベット順

第1章

ニナ・カネル	1979年スウェーデン、ヴェクショー生まれ、ベルリン在住
ハンス・ハーケ	1936年ドイツ、ケルン生まれ、ニューヨーク在住
ヨッヘン・ランパート	1958年ドイツ、メールス生まれ、ハンブルク在住
エミリヤ・シュカルヌリーテ	1987年ヴィリニウス生まれ、同地およびノルウェー、トロムソ在住
セシリア・ヴィクワニャ	1948年サンティアゴ生まれ、同地およびニューヨーク在住
アピチャップン・ウィーラセタクン	1970年バンコク生まれ、チェンマイ在住

第2章

藤田昭子	1933年神奈川生まれ、同地在住
桂 ゆき	1913年東京生まれ、1991年同地にて没
木村恒久	1928年大阪生まれ、2008年東京にて没
鯉江良二	1938年愛知生まれ、2020年同地にて没
工藤哲巳	1935年大阪生まれ、1990年東京にて没
村岡三郎	1928年大阪生まれ、2013年滋賀にて没
長澤伸穂	1959年東京生まれ、ニューヨーク在住
中西夏之	1935年東京生まれ、2016年同地にて没
中谷芙二子	1933年北海道生まれ、東京在住
岡本太郎	1911年神奈川生まれ、1996年東京にて没
谷口雅邦	1944年青森生まれ、東京在住
殿敷 侃	1942年広島生まれ、1992年島根にて没

第3章

モニラ・アルカディリ*	1983年生まれ、ベルリン在住 *クウェート国籍
ジュリアン・シャリエール	1987年スイス、モルジュ生まれ、ベルリン在住
アリ・シェリ	1976年バイルート生まれ、同地およびパリ在住
ダニエル・ターナー	1983年バージニア州ポーツマス生まれ、ニューヨーク在住
保良 雄	1984年滋賀生まれ、パリおよび千葉在住

第4章

マルタ・アティエンサ	1981年マニラ生まれ、オランダおよびフィリピン在住
イアン・チェン	1984年ロサンゼルス生まれ、ニューヨーク在住
アグネス・デネス	1931年ブタペスト生まれ、ニューヨーク在住
ジェフ・ゲイス	1934年ベルギー、レオポルドスブルグ生まれ、2018年ベルギー、ヘンクにて没
シェロワナウィ・ハキヒウィ	1971年ベネズエラ、アマソナス州アルト・オリノコ、シェロワナ生まれ、同地在住
ピエール・ユイグ	1962年パリ生まれ、サンティアゴ在住
松澤 宥	1922年長野生まれ、2006年同地にて没
アナ・メンディエータ	1948年ハバナ生まれ、1985年ニューヨークにて没
ケイト・ニュービー	1979年ニュージーランド、オークランド生まれ、テキサス州フローレスビル在住
アサド・ラザ	1974年ニューヨーク州バッファロー生まれ、ニューヨークおよびドイツ、ライプツィヒ在住
西條 茜	1989年兵庫生まれ、京都在住

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊原
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

開催概要

展覧会名: 森美術館開館20周年記念展
 「私たちのエコロジー: 地球という惑星を生きるために」

主催: 森美術館

20周年記念協賛: 株式会社大林組、清水建設株式会社、鹿島建設株式会社

協賛: 麻生グループ、株式会社きんでん、トヨタ自動車株式会社、
 三菱電機ビルソリューションズ株式会社、斎久工業株式会社、
 三機工業株式会社、株式会社竹中工務店、ユニ・チャーム株式会社、
 株式会社雄電社

協力: チヨダウーテ株式会社、シャンパーニュ ポメリー

助成: 文化庁、スウェーデン芸術助成委員会、スイス・プロ・ヘルヴェティア文化財団

制作協力: エルメス財団、デルタ電子株式会社、関ヶ原石材株式会社、おだわら名工舎

企画: マーティン・ゲルマン(森美術館アジャクト・キュレーター)、
 椿 玲子(森美術館キュレーター)
*** 第2章ゲスト・キュレーター**
 バート・ウィンザー=タマキ(カリフォルニア大学アーバイン校美術史学科教授、美術史家)

会期: 2023年10月18日(水) - 2024年3月31日(日)

会場: 森美術館(東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー53階)

開館時間: 10:00-22:00(火曜日のみ17:00まで、ただし1/2、3/19は22:00まで)
 * 10/26(木)17:00閉館 * 入館は閉館時間の30分前まで * 会期中無休

入館料:

	[平日]		[土・日・休日]	
	オンライン	当日窓口	オンライン	当日窓口
一般	1,800円	2,000円	2,000円	2,200円
学生 (高校・大学生)	1,300円	1,400円	1,400円	1,500円
子供 (4歳~中学生)	700円	800円	800円	900円
シニア (65歳以上)	1,500円	1,700円	1,700円	1,900円

- * 事前予約制(日時指定券)を導入しています。専用オンラインサイトから「日時指定券」の購入が可能です。
- * 当日、日時指定枠に空きがある場合は、事前予約なしでご入館いただけます。
- * 表示料金は消費税込
- * 本展のチケットで、同時開催プログラムもご鑑賞いただけます。

同時開催: 「MAMコレクション017: さわひらき」
 「MAMスクリーン018: カラビン・フィルム・コレクティブ」
 「MAMプロジェクト031: 地主麻衣子」

一般のお問い合わせ: Tel: 050-5541-8600(ハローダイヤル) 森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum



プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊原
 Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp



本展のポイント

■ 環境危機に対して、現代アートができること

世界共通の喫緊の課題である環境危機に対し、現代アートがどのように向き合い、私たちの問題としていかに意識が喚起されるのか。世界16か国、34人のアーティストが作品に込めたコンセプトや隠喩、素材、制作プロセスなどを読み解き、ともに未来の可能性を考えます。

■ 日本の社会や現代美術史をエコロジーの観点から読み解く

ゲスト・キュレーターのバート・ウィンザー＝タマキによる「第2章：土に還る 1950年代から1980年代の日本におけるアートとエコロジー」では、1950年代から1980年代に日本のアーティストが、当時社会問題となっていた公害や放射能汚染問題にどのように向き合ってきたかを紹介します。昨今、世界各地で環境問題に関する展覧会が開催されていますが、なかでも本章は、本展を日本の文脈から特徴づけるユニークな試みです。

■ モノよりネットワーク：世界が注目する国際的なアーティストの新作多数

できる限り作品というモノ自体の輸送を減らし、作家本人が来日し、新作を制作してもらうことを計画しました。アーティストを文化の媒介者と捉え、モノの移動よりも、人的なネットワークや繋がりを構築することにエコロジカルな価値を見出します。日本でのリサーチに基づいて制作された新作群は、展示室のスペースの半分以上を占めます。

■ 日常を再利用する

本展では、身近な環境にあるものを素材として再利用した作品が多く出展されます。森美術館の1キロメートル四方に生えている植物を調査・採取して押し花にする**ジェフ・ゲイス**の作品、六本木から銀座への道すがら発見したものを組み込んだ**ケイト・ニュービー**のインスタレーション、インドのアランで解体された日本籍のケミカル・タンカーの計器を用いて、海洋環境について、二つの場所と視点から考える**ダニエル・ターナー**の新作、ゴミを高温で溶解させたスラグと大理石を並置する**保良雄**のインスタレーション、貝殻を観客が踏みしめる感覚と音を体験できる**ニナ・カネル**の作品など様々です。なお、カネルの観客によって粉砕された貝殻は、展覧会終了後、セメントの原料としてさらに再利用される予定です。

■ 環境に配慮した展示デザイン

前の展覧会の展示壁および壁パネルを一部再利用し、塗装仕上げを省くことで、環境に配慮した展示デザインとなっています。また、世界初の100%リサイクル可能な石膏ボードを採用するほか、再生素材を活用した建材の使用、資材の再利用による廃棄物の削減など省資源化に取り組みます。

最新のプレス画像は、こちらのURLより申請、ダウンロードいただけます。

<https://tayori.com/f/ourecology/>

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊原
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

本展の構成

第1章 全ては繋がっている

本展が定義する「エコロジー」は、「環境」だけに留まりません。この地球上の生物、非生物を含む森羅万象は、何らかの循環の一部であり、その循環をとおしてこの地球に存在する全てのモノ、コトは繋がっています。最初の章では、そのような循環や繋がりのプロセスを様々な形で表現する現代アーティストたちの作品を紹介します。

ハンス・ハーケの、社会や経済のシステムと、動物や植物などの生態系とをつなぐ視点で撮影された記録写真の展示や、貝殻という有機物がセメントなどの建材に変換されるプロセスを来場者自身に追体験させる、ニナ・カネルの大規模なインスタレーションは、私たちが広大で複雑に絡み合う循環(エコロジー)の中にあることを想起させてくれるでしょう。



(左)
ハンス・ハーケ
《海浜汚染の記念碑》(《無題》1968-1972/2019年の部分)
1970年 デジタル C プリント 33.7×50.8 cm
Courtesy: Paula Cooper Gallery, New York
© Hans Haacke / Artists Rights Society (ARS), New York
(右)
ニナ・カネル
《マッスルメモリー(7トン)》
2022年 海生軟体動物の殻を利用した造園材料
サイズ可変
展示風景:「Tectonic Tender」ベルリーニツシェ・ギャラリー
(ベルリン)
撮影: Nick Ash ※参考図版

第2章 土に還る 1950年代から1980年代の日本におけるアートとエコロジー

日本は戦後の高度経済成長期において、自然災害や工業汚染、放射能汚染などに起因する深刻な環境問題に見舞われました。本章では、日本の社会や現代美術史をエコロジーの観点から読み解くべく、1950年代以降の日本人アーティストの作品や活動に注目します。彼らが環境問題に対してどのように向き合ってきたかを、50年代、60年代、70年代、80年代と時系列に考察しながら、各時代の代表的な表現方法の変遷を辿ります。

ビキニ環礁で第五福竜丸が被爆した事件を扱った、桂ゆきの絵画作品《人と魚》(1954年)や、日用品を卵型のアクリル樹脂に詰め込んだ、中西夏之の《コンパクト・オブジェ》(1966/1968年)。また、土を素材に原爆や反原発を主題とする作品を制作した鯉江良二の《土に還る》(1971年)では、作家自身の顔が崩れ土に還る姿が表現され、谷口雅邦は1980年代に制作した自然と人間との関係性を表現した生け花を再現展示します。



鯉江良二
《土に還る(I)》
1971年 シェルベン(衛生陶器を粉末にしたもの)
32×50×50 cm
所蔵:常滑市(愛知)
撮影:怡土鉄夫



桂 ゆき
《人と魚》
1954年
油彩、キャンバス
116×90.8 cm
所蔵:愛知県美術館

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊原
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

第3章 大いなる加速

人類は、地球上のあらゆる資源を利用して文明を発展させ、工業化、近代化、グローバル化を押し進めてきました。しかしながら産業革命以降、加速度的に発展した科学技術や産業社会は、「人新世」という地質学上の区分が議論されているように、短い期間で地球環境を変化させました。本章では、こうした人類にとって喫緊の課題を批判的な視点で分析しつつ、現状を取り巻く文化的、歴史的背景を題材とする作品を通じて、より広い視点から地球資源と人間の関係を再考します。

モニラ・アルカディリの養殖真珠を主題とした新作には、自然の生態系に深く介入する人間の欲望と夢が表現されています。**保良雄**の展示では、何億年もかけて自然に形成された大理石とゴミを高温で溶解したスラグとを並置することで、異なる時間軸を表現してみせます。この他にも古代の神話から個人的な経験、社会問題、環境危機まで、それぞれの作品が、地球資源と人類との多様な関わり合いを示唆します。



(左)
モニラ・アルカディリ
《恨み言》(イメージ図)
2023年
(右)
保良雄
《fruiting body》
2022年
インスタレーション
展示風景: Reborn-Art Festival
2021-22: 利他と流動性 [後期]
撮影: 齋藤太一
※参考図版

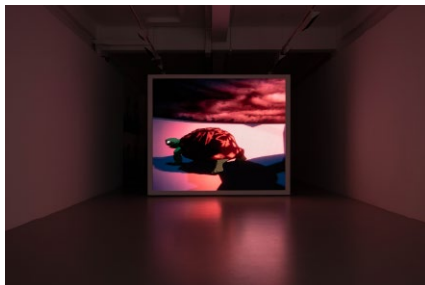
第4章 未来は私たちの中にある

環境危機は私たち自身の「選択」が招いた結果です。現状を打破するには、私たち人間が在り方を改めることが必要でしょう。未来にはどんな選択肢が残されているのでしょうか。本章では、非西洋的な世界観を讃える作品、モダニズムの進歩と終わりのない成長原理への疑問、アクティビズム、先住民やフェミニズムの視点、精神性(スピリチュアリティ)、デジタル・イノベーションがもたらす可能性とリスクなど、私たちが頼みとすべき、さまざまな叢智を顧みながら、地球の未来を再考します。

アグネス・デネスは、1982年にニューヨークのマンハッタンに麦畑を出現させることで、開発主義へ疑問を呈しました。**ジェフ・ゲイス**の六本木ヒルズのコミュニティと協働するプロジェクトでは、雑草を、癒しをもたらすものとして再認識させます。また、**西條茜**の複数の人間で共有し演奏する楽器のような陶器は、新しい共生の可能性を示唆します。**イアン・チェン**の作品では、AIシミュレーションの亀「サウザンド」が生き残るための様々な条件を満たすために動き回り、変化に対応することで進化します。



西條茜
《果樹園》
2022年
陶
130×82×82 cm
展示風景: 「Phantom Body」
アートコートギャラリー (大阪)
2022年
撮影: 来田 猛



イアン・チェン
《1000(サウザンド)の人生》
2023年
ライブ・シミュレーション、サウンド
永続
Courtesy: Pilar Corrias, London;
Gladstone Gallery, New York
展示風景: 「イアン・チェン: 1000
(サウザンド)の人生」ピラー・コリアス(ロンドン)、2023年
撮影: アンドレア・ロッセッティ

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊原
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

?! 展覧会関連プログラム

■ シンポジウム「私たちのエコロジー」 *日英同時通訳・手話同時通訳付

喫緊の課題である環境危機に対する意識は国際的なアートシーンでも高まりを見せ、特にこの数年はフェミニズムやクィアネスの視点、デジタル・イノベーションがもたらす可能性やリスクなど、社会的な視点から気候変動やエコロジー問題にアプローチする展覧会が開催されています。それらの展覧会を企画したキュレーターは人類共通であるこの課題とどのように向き合い、現代アートを通して何を伝えようとしているのでしょうか。「私たちのエコロジー：地球という惑星を生きるために」の開催にあたり、世界各地で活躍する3名のキュレーターたちを迎え、環境危機に対する現代アートからの応答をどのように捉え展覧会を企画したのか、また現代アートはどのように環境危機に関わることができるのか、その可能性について対話します。

出演：ニコラ・ブリオー(第15回光州ビエンナーレ・アーティストック・ディレクター) *オンライン出演

長谷川祐子(金沢21世紀美術館館長)

チュス・マルティネス(キュレーター、美術史家、バーゼル芸術デザイン・アカデミー・ディレクター)

マーティン・ゲルマン(本展キュレーター/森美術館アジャクト・キュレーター)

椿 玲子(本展キュレーター/森美術館キュレーター)

日時：2023年11月3日(金・祝)17:00-19:00

会場：アカデミーヒルズ(六本木ヒルズ森タワー49階)

定員：150名(要予約)

料金：500円

主催：森美術館

協力：アートウィーク東京

お申し込み：森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum

■ アーティストトーク *日英同時通訳・手話同時通訳付

本展出展アーティストが、自作について語ります。

出演：モニラ・アルカディリ、ニナ・カネル、アサド・ラザ、エミリヤ・シュカルヌリーテ

日時：2023年10月18日(水)18:30 - 20:30

会場：森美術館オーデトリウム(六本木ヒルズ森タワー53階)

定員：70名(要予約)

料金：無料(ただし、当日有効の本展覧会チケットが必要です)

お申し込み：森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum

■ トーク「土に還る 1950年代から1980年代の日本におけるアートとエコロジー」

*日英同時通訳・手話同時通訳付

「私たちのエコロジー」展第2章ゲスト・キュレーターのバート・ウィンザー＝タマキが、本章で紹介している日本人アーティストについて語ります。

出演：バート・ウィンザー＝タマキ(カリフォルニア大学アーバイン校美術史学科教授、美術史家)

日時：2023年10月19日(木)18:30 - 20:00

会場：森美術館オーデトリウム(六本木ヒルズ森タワー53階)

定員：70名(要予約)

料金：無料(ただし、当日有効の本展覧会チケットが必要です)

お申し込み：森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊原
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

■キュレーターによるギャラリートーク

本展のキュレーターが展示室内でツアー形式のトークを行います。

日時：2023年11月15日(水) 19:00-20:00 ガイド：マーティン・ゲルマン(森美術館アジャクト・キュレーター) 言語：英語
2023年12月13日(水) 19:00-20:00 ガイド：椿 玲子(森美術館キュレーター) 言語：日本語

会場：森美術館展示室内(六本木ヒルズ森タワー53階)

定員：各回15名

料金：無料(ただし、当日有効の本展覧会チケットが必要です)

お申し込み：不要(当日先着順、展覧会会場入口にお集まりください)

■アクセス・オンライン・プログラム「オンラインでアート」 *オンライン、日本語のみ

森美術館ラーニング・スタッフが開催中の展覧会を紹介しながら、現代アートの楽しみ方や森美術館がある六本木の街の楽しみ方などについてお話しします。参加される方にあわせた対話形式で実施しますので、まだ森美術館に来たことがない方、思うように外出ができない方、どなたでも気軽にご参加ください。お申し込みの際に、言葉での作品の説明や手話での対話など、必要なお手伝いについてお知らせください。

日時：2024年2月16日(金)12:00-13:15

2024年3月7日(木)12:00-13:15

会場：Zoomを使つてのオンライン・プログラムとして実施します。

定員：各10組(要予約)

料金：無料

お申し込み：森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum

*定員を超えるお申し込みの際には抽選となります。

■学校と美術館のためのプログラム *日本語のみ

現代アートと子どもたちの学びや学校と美術館の連携について、教育現場に立つ皆さんと美術館スタッフがディスカッションします。図工や美術のみならず、美術館の活用に関心を寄せている他教科の先生も、ぜひご参加ください。

日時：2023年12月21日(木)16:00-18:00

会場：森美術館オーディトリウム(六本木ヒルズ森タワー53階)

対象：保育園、幼稚園、小・中学校、高校、大学、専門学校の教員

定員：15名(要予約、先着順)

料金：無料

お申し込み：森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum

*プログラムは予告なく変更になる場合があります。あらかじめご了承ください。

*このほかにも、アーティスト・パフォーマンス、おやこでアート、スクールプログラム、アクセスプログラムなどさまざまな企画を予定しています。プログラムの詳細やお申し込みなどの最新情報は、森美術館ウェブサイトにてご確認ください。www.mori.art.museum

プログラムに関するお問い合わせ：森美術館 ラーニング担当

E-mail: mam-learning@mori.co.jp

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊原
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

関連情報

■ 音声ガイド

本展出版作品の解説や見どころが収録された音声ガイドをウェブアプリにてご用意しています。

*スマートフォンやイヤフォンの貸し出しは行っておりませんのでご持参ください。

ガイド件数:全15件 解説時間:約35分 言語:日本語、英語 料金:500円(税込) 企画・制作:スタイリンクス 監修:森美術館

■ 展覧会カタログ

論考執筆者:南條史生(森美術館特別顧問)、マーティン・ゲルマン(森美術館アジャクト・キュレーター)、

椿 玲子(森美術館キュレーター)、バート・ウィンザー=タマキ(カリフォルニア大学アーバイン校美術史学科教授、美術史家)

インタビュー:ディペシュ・チャクラバルティ(シカゴ大学歴史学部ローレンス・A・キンプトン特別功労教授)

サイズ:A4判(29.7×21cm) ページ数:240ページ 言語:日英バイリンガル 価格:3,960円(税込)

発売日:2023年12月下旬(予定) 編著:森美術館 発行:左右社

販売場所:森美術館 ショップ 53(六本木ヒルズ森タワー53階) 森美術館 ショップ(六本木ヒルズウェストウォーク3階)

森美術館オンラインショップ(<https://shop.mori.art.museum/>)

■ 展覧会オリジナルグッズ

「軍手-GUNTE」(Work Gloves)

繊維工場などの製造過程で出てしまう使用されなかった糸(残糸)やリサイクル繊維の糸から作られた環境に優しい「軍手-GUNTE」は肉厚でつけ心地が良く、作業用だけでなく、ファッションアイテムとしてもご利用いただけます。本展覧会オリジナルとして、ポスターやロゴのカラーに使用されているカラフルな黄色と空色、マルチカラー2種の計4種をご用意致しました。色合いには個体差があります。それぞれの風合いをお楽しみください。

価格:990円(税込)



お問い合わせ:森美術館 ショップ 53

Tel: 03-6406-6118 営業時間:10:00-22:00(祝日を除く火曜日は17:00まで) *美術館の開館時間に準ずる

■ 関連企画 エルメス財団「エコロジー:循環をめぐるダイアログ」展

本展では森美術館を一つの生態系と捉え、自館を超えて他機関と有機的な共生関係を築くべく、エルメス財団と対話を重ねてきました。その結果、森美術館と銀座メゾンエルメスフォーラムというふたつの場所、またその間に広がる都市との繋がりも持ちながら、エコロジーの考察を拡張する展示を行うこととなりました。

銀座メゾンエルメスフォーラムでは「エコロジー:循環をめぐるダイアログ」展が開催されます。

保良雄とケイト・ニュービーは、両機関の展覧会に出展することで、二つの生態系を繋ぐ存在ともなっています。

「エコロジー:循環をめぐるダイアログ」

ダイアログ1:「新たな生」崔在銀(チェ・ジェウン)展 会期:2023年10月14日(土)~2024年1月28日(日)

ダイアログ2:「つかの間の停泊者」展 | ケイト・ニュービー、保良雄、ニコラ・フロック、ラファエル・ザルカ

会期:2024年2月16日(金)~5月31日(金)

会場:銀座メゾンエルメスフォーラム 主催:エルメス財団

ウェブサイト:<https://www.hermes.com/jp/ja/story/maison-ginza/forum/231014/>

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内):日比、松川、伊原
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

森美術館「私たちのエコロジー:地球という惑星を生きるために」 同時開催小プログラムのご案内

会期: 2023年10月18日(水) - 2024年3月31日(日) 会場: 森美術館(六本木ヒルズ森タワー53階)



MAMコレクションは、森美術館の収蔵品を、
多様なテーマに沿って順次紹介する展覧会シリーズです。

MAMコレクション017: さわひらき

主催: 森美術館

企画: 矢作 学(森美術館アシスタント・キュレーター)

<https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/mamcollection017/index.html>



さわひらき
《hako》
2007年
6チャンネル・ビデオ・インスタレーション、カラー、
ステレオ
12分(ループ)



MAMスクリーンは、世界の多様な映像作品のなかから
選りすぐりのシングル・チャンネル作品を上映するプログラムです。

MAMスクリーン018: カラビン・フィルム・コレクティブ

主催: 森美術館

企画: 矢作 学(森美術館アシスタント・キュレーター)

<https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/mamscreen018/index.html>



カラビン・フィルム・コレクティブ
《人魚、あるいは不思議の国のエイデン》
2018年
ビデオ
26分29秒



MAMプロジェクトは森美術館が世界各地のアーティストと
実験的なプロジェクトを行うシリーズです。

MAMプロジェクト031: 地主麻衣子

主催: 森美術館

企画: 熊倉晴子(森美術館アシスタント・キュレーター)

<https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/mamproject031/index.html>



地主麻衣子
《空耳》のためのドローイング
2023年
Courtesy: HAGIWARA PROJECTS(東京)

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊原
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp